社協活動最前線

酒田市 社会福祉協議会

住民の
助け合い活動を広げ、
商業の活性化も図り
地域づくりの役割を果たす

酒田のシンボル山居倉庫とケヤキ並木

酒田市社協と酒田市は平成３年から学区・地区社協の組織化と見守り活動「草の根事業」に取り組み、学区・地区社協が推進する地域福祉活動を支援してきた。平成17年の１市３町合併を契機に「新・草の根事業」に受け継がれ、平成24年度には市内の２学区・地区で「地域支え合い活動」がモデルとして始まった。
その一つである琢成学区の実践を中心に、地域の商店と連携した取り組みを紹介する。

社協データ

【地域の状況】（平成27年10月31日現在）

人　口	106,896人
世帯数	41,933世帯
高齢化率	32.3%

【社協の概要】（平成27年11月末）

理　事	15人
評議員	35人
監　事	3人
職員数	99人（正規職員44人、臨時職員55人）

【主な事業】
- 新・草の根事業
- 新たな地域支え合いの仕組みづくり
- 高齢者、障がい者等の権利擁護事業
- 生活困窮者自立相談支援事業
- ボランティアセンター事業
- 相談事業（心配ごと相談、避難者生活支援相談等）
- 介護保険・障がい児（者）福祉サービス事業

新・草の根事業の展開

現在、酒田市内には概ね小学校区単位に36学区・地区社協が組織され、新・草の根事業を展開している。新・草の根事業とは、学区・地区社協が主体となって取り組む地域福祉活動で、その概要は次の通りである。

- **見守りネットワーク支援事業**
  対象者の近隣住民等で「福祉隣組」を組織して地域で見守りを行う事業
- **合同研修事業**
  自治会長・民生委員・福祉協力員、学区・地区社協役員等の資質向上を図るために研修会等を開催する事業
- **ふれあい給食事業**
  ひとり暮らし高齢者等へ手作りの給食を提供する事業
- **地域あんしん事業**
  地域内の日常生活相談に応じるとともに、市社協との連携を密にするための事業
- **地域交流サロン事業**
- **介護予防講座事業**

地域に生活福祉課題がある 支え合いが必要ではないか

学区・地区社協が中心となって地域づくりをすすめる中、平成24年度に市内の２学区・地区で「地域支え合い活動」が始まった。この背景には地域課題に対する危機意識がある。酒田市と酒田市社協が平成21年度から安心生活創造事業に取り組んだことで以下の地域課題と必要な取り組みがより明確になった。①孤立傾向が高い高齢者等の把握と、必要となる支援の想定と備え②地域の支援体制の構築③地域の支え合い活動の推進④多様化・複雑化する福祉相談への対応。

課題のひとつである地域の支え合い活動の推進に向けて、酒田市は各種団体から構成する「地域あんしん生活支援研究会」を組織して平成23年度に検討を行う。本研究会が「支え合いの仕組みづくりに取り組んでいく必要がある」と確認し、高齢化率が高い琢成学区と日向地区でモデル事業を開始することとなったのである。

琢成学区の状況

今回取材した琢成学区は市の中心地に位置し、人口約6300人、45の自治会があり、隣近所のつながりが強い学区である。高齢化率は42%。中心市街地の空洞化等により少子高齢化が進行している状況がある。

琢成学区社協は平成3年に発足し、「草の根事業」を通して、福祉隣組と福祉協力員を中心とした見守りネットワーク支援事業、ふれあい給食事業（配食・会食会）による見守りを続けてきた。地域交流サロンは自治会単位で取り組み、現在13自治会で開催している。

研修会を通して地域課題を共有

モデル地区では、平成24年度に「地域支え合い研修会」（4回）を開催。琢成学区では学区社協の構成員を中心に約80人が参画した。琢成学区社協前会長の森谷功喜さんは「非常に熱心に話し合った」と熱気を込めて当時の状況を伝える。住民自身が多様な地域課題を意識しながら話し合い、案の中にあった助け合いの活動「よろずや琢成」に取り組んでいくこととなった。

商店と連携した よろずや琢成の仕組み

よろずや琢成は、住民のちょっとした困りごとを、サポーターの住民が手伝う活動。住民が利用登録・サポーター登録して助け合う仕組みだ。

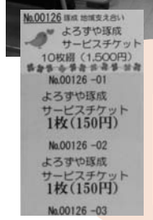
仕組みづくりは酒田市社協と酒田市が支援している。また、「無償では頼みづらい」との意見が多かったことから、有償制の仕組みを採用した。商業の空洞化を防ぐとともに地域活性化につなげたい思いから、市内のスーパーマーケット3店と話し合い、商品券・地域振興券を活用することとした。利用登録者がチケットを購入し、手伝いの礼にサポーターがチケットを受け取り、一定数溜まると学区内の3店舗で活用できる商品券・地域振興券に交換できる。地域振興券は、商品券の仕組みをもっていなかった2店舗用に社協が独自に作成したもので、サポーターが券を使用したら社協が換金する仕組みである。PRリーフレット・チケット・地域振興券・備品の作成・購入費は、酒田市と酒田市社協が助成している。

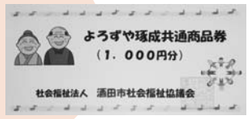
困りごとの依頼は、身近な人に頼みたいとの意向があったため、利用登録者もサポーターもよく知っている民生委員と自治会長がマッチングする仕組みとした。事業で助け合う内容も話し合って決め、問答集形式の実施要綱を策定した。

サポーターの募集では全戸に案内を回覧する方法を採用したところ、すぐに50人を超える住民からの応募があり、平成25年11月に事業を開始した。

利用登録は当初19人と予想を下回ったが、ひとりの女性から「パソコンを習いたい」という相談があり、交流を兼ねたパソコン教室が評判になっていった。現在は34人の利用登録があり、ごみ出し、灯油詰め等を助け合っている。依頼が多い地域では自治会に呼びかけてサポーターを増やすなどの工夫もしている。

利用者がチケットを購入する様子





「おかげさまで助かったよ」という声が寄せられており、困っていても遠慮していた人がいることもわかってきた。仕組みができたことで気兼ねなく頼めるようになるなど、成果を感じているという。

今後の重点目標は手助けが必要な人の掘り起こしである。現在は民生委員や地域包括支援センター職員からつながることが多い。学区の複数の自治会ではよろずや琢成を重点事業に位置づけており、こうした動きも含め、今後は活動の周知をすすめることとしている。

学区の機運を高めることも重要だ。現在、30代から80代の学区の住民64人がサポーター登録している。依頼が少なくても学区に必要な事業であることを共有するため、琢成学区社協では「サポーター交流会」を開催している。

地域に出向いて 社協の役割を果たす

酒田市社協では、学区・地区の支援を強化するため、平成25年度から地区担当制を導入した。8人の職員が3～7学区・地区を担当し、地域に出向いて、住民と一緒に地域課題への対応、地域づくりをすすめている。

職員が地域に入っていくことで地域の課題がわかり、地域の人たちと信頼関係を築きながら一緒に動くことができる。社協は地域における役割を果たしていこうとしている。

今後、地域づくりをすすめるうえで深刻なのが、地域活動の担い手をいかに増やしていくかという課題である。現在、市内各地の地区社協の懇談会でも同様の課題があげられている。この課題をどうするのか。酒田市社協会長の阿部直善さんは「助け合いが必要なことは地域のみなさんは気づいていて、自分たちで取り組もうという思いがある。しかし、後についてくる人がいるのか不安に感じている。社協は地縁の活動を担う人材を時間をかけてでも育てていかなければならない」と話す。

また琢成学区社協会長の上田勝弥さんは今後の目標についてこのように話す。

「活動を続けられるよう、みんなで話し合いを続けたい。困っていることがあったら気軽に言い合える和や絆が濃い、みんなが希望をもてるまちづくりに協力していきたいと考えています」

現在、酒田市社協は酒田市と山形県から委託を受けて生活困窮者自立相談支援事業も行っている。よろずや琢成で受けた依頼から相談につながったり、住民のつながりが強まることで、孤立している人を支える地域づくりがすすむことが期待される。また、移行を控える新しい総合事業についても、よろずや琢成の仕組みも活かしたいとのことで、社協の力量が問われている。36学区・地区社協と酒田市社協と酒田市はこれからも地域づくりの役割を果たしていこうとしている。

酒田市（山形県）

酒田市は、山形県の北西部に位置するまち。港町や穀倉地帯として発展してきた。
平成17年に酒田市、八幡町、松山町、平田町が合併し、新たな酒田市として誕生した。
市の面積は602.97㎢。現在の人口は10万6896人。